

## みる 観察

# 札幌にいてもできた キルギスの農協調査

一般社団法人 北海道地域農業研究所

所長 坂下 明彦

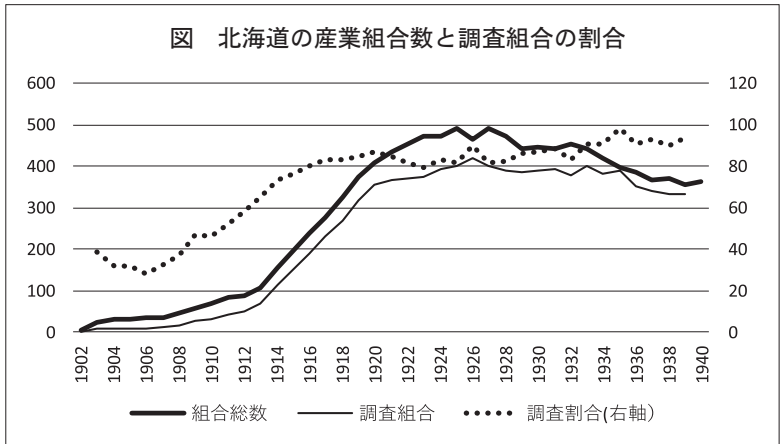
JICA北海道の「中央アジアで農協の組織強化を図るための研修コース」が一〇月に開催された。この巻頭言でも紹介したが、一カ月間ほど研修員を札幌に招聘して、みっちり農協の勉強をしてみよう場である。今年は、キルギスから四名、カザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタンから各一名の少人数教育であるが、われわれが一押しするキルギス中心となっている。日本のことを勉強する傍ら、帰国後に備えてアクションプランというものを作成する。形式的なもの

ではなく、みんな頑張るし、個人面談で相当バックアップするから、次第にレベルの高いものになってきた。その代わり、われわれも現地に赴くことなく、農協や農業経営について突っ込んだ質問をすることが出来る。今回は、二手に分かれてひとり二時間以上にわたる個人指導を二回行った。

「地域農研」組の私と星野愛花里研究員はキルギスを担当したが、人手不足のため星野がキルギス語で通訳をするという冒険となった。キルギスの研修員は、

一名が農業省の女性の担当官、もう一名が政府系のA R I S（地域開発投資庁）という国際機関の支援プロジェクトの受け皿機関の職員、残り二人は農協の組合長という組み合わせであった。こっちが選んで研修員を派遣してもらうわけではないので、あてがい扶持で聞き取りをすることになる。結果として、プロジェクト型の農協づくりが具体的にどのように行われているのかという枠組みとなった。これを紹介してみよう。

農業省のヌリラさんからは最新の農協のデータをもらうことができたのだが、その数は五二四組合。現存農協の設立年をみると、一番古いのが一九九一年、二〇〇七年を中心に四年間で一一三の設立の山があり、さらにここ二年で一一九組合が設立されている。増加傾向にあるのだが、それが続くかどうかはわからない。JICAが支援してまとめたレポートでは、二〇〇七年には一、〇二〇組合、二



注) 『北海道産業組合 (並びに農業倉庫) 要覧』各年度より作成。

〇二一年には一、四二八組合あったこと  
 になっている(注一)。二〇〇七年はキル  
 ギス協同組合連盟(CUK)がドイツ国際  
 協力公社(GIZ)の支援プロジェクトの  
 もとで設立された年であった。このよう

にキルギスの農協は、いまだ初期段階と  
 言つてよく、組織率も低く、組織そのも  
 のも不安定である。しかし、駄目だとい  
 うのはまだ早い。我慢強さが大事である。

北海道の初期の農協を例にとってみよ  
 う。図を見ていただきたい。産業組合法  
 制定は一九〇〇年であるが、北海道での  
 最初の設立は〇二年。一三年には一〇〇  
 組合を超えるが、組合の組織・事業を調  
 査できた組合数の割合は五〇%台に過ぎ  
 ない。調査ができる段階ではなかったの  
 である。八〇%を超えるのは第一次世界  
 大戦が終わり、組合数も三〇〇から四〇  
 〇組合に急増する頃であった。そして、  
 九〇%を超えるのは三三年、最初の設立  
 から三〇年経って経営もやっと安定した  
 のである。単純に比較はできないが、農  
 協設立から運営が軌道に乗るまでにはか  
 なりの時間がかかるのである。

話を戻そう。キルギスの農協の設立や  
 運営のサポートを行っているのはCUK

であり、現在では傘下に二五〇余りの農  
 協がある。しかし、今回来日したグルア  
 イムさん(女性)の所属するARRSでは、  
 プロジェクト遂行の大きな手段として農  
 協の設立や育成に取り組んでおり、CU  
 K系列とは別のものである。ARRSは  
 二〇〇三年の設立以来、世銀やアジア開  
 発銀行などから大型プロジェクトを受け  
 入れている。組織は首都ビシケクの他  
 七州すべてに支所を置き、職員は四〇〇  
 名にのぼる。グライムさんは、二〇一  
 八年から始まった畜産を対象とする「市  
 場アクセスプロジェクト」の下で働いて  
 いる(注二)。彼女が担当している酪農で  
 いえば、生産では小規模農家を農協に組  
 織化して乳質改善をはかること。流通で  
 は集乳業者を通さず乳業メーカーと直接  
 取引する内容である。その前提として農  
 協の役割に関する研修会を開催し、なか  
 でも女性リーダーの育成を行っている。  
 かなり短期間で一一四の農協を新設し、

合計一七の農協の組織化を図ったという。飼料用の農業機械や畜舎などの助成目的で設立された農協もあり、導入後に休眠しているものもあるらしい。農協と言っても、一〇から二〇戸ほどで構成され、日本の農事組合法人に相当するものが主流である。

残り二人の研修生は農協組合長だったが、たまたま二つともこのプロジェクト傘下の農協であった。三人目の研修員のヌルベックさん(四一歳)は、地元ナリン州の大学を出てビシケクで修士課程を終えたインテリ。実家に戻り、家族や友人と八人で始めたのが「ヌール(光)」農協。最初は一〇haだったが、現在は国有地も借りて一三〇haに。組合員も九家族一五人に増えている。作物は飼料作物であり、一部コーンサイレージは販売している。このハーベスターと五〇頭牛舎をA R I Sの支援で充実し、酪農にも力を入れようとしている。また、組合設立

から二年目の二二年にクルト(キルギスの固いチーズ)を、その後クッキーも加えて製造と販売を行っており、JICAの一村一品運動の指定も受けている。六次産業化の動きである。

四人目のアリアスカルさん(二八歳)もトルコのアンカラ大学を卒業して、ビシケクで博士を取得した秀才。二〇年に地元に戻り酪農を開始、二一年には「ウルス・アタ・オルガニカ」という酪農協同組合を設立している。これはまさにA R I Sのプロジェクトにそっている。現在は八家族で、あわせて耕地が一四〇ha、トウモロコシ、牧草、大麦などを作付けして、共同作業している。コーンのハーベスタは助成である。乳牛は全体で八〇頭おり、本人はそのうち三〇頭。経営は個々であり、A R I Sの支援によるクラーに組合員が生乳を持ち寄って、集乳業者を通さずメーカーへ直接搬入を行うようになった。サイレージ飼養により乳

量も向上し、単価も向上している。また、トウモロコシの種子や肥料の共同購入も手掛けるようになっていいる。彼は、全国の商工会議所乳業発展委員会の委員長もやっており、頼もしい限りである。

このように、札幌にいてもキルギスの農村に分け入り新しい息吹を感じることができる。役得である。今年の夏は行きそびれたが、来年にはキルギスの夏営地で調査三昧の生活をしてみたいものである。

(注1) ナジク他『キルギスにおける農業協同組合の発展』(英文) IDA1、二〇二一による。

(注2) 家畜バリエーション開発と付随したファイナンス、および家畜衛生システムの近代化が大きな枠組みである。A R I Sは家畜生産者・加工業者・零細農家グループの能力開発、集荷能力の強化を担当している。